

「アドバイザーとともにつくる、地域支援システム」事例集

自立支援協議会の活性化に向けて



はじめに

慢性疾患の時代には、各種の疾病に罹ると、病院だけでは完結せずに、退院後に地域生活をしながら病気や障害と向き合う。元々「ハンディを有する」あるいは「合理的な配慮を要する」方々も同様に、この地域社会の中で生きていくことになる。「健常者」と思っている人々も、いつの日か障害をもち、年をとって、それでもこの地域社会で生きていく。「合理的な配慮」を検討していくことは、結局、この地域社会を自分が住みやすいものにする営みであろう。

私は、精神科医になろうとして精神病院で研修を始めた。一生入院が当たり前であった古い病院を建て替えて、職員が一丸となって退院促進をした。1970年代の話である。3年間で平均在院日数が180日程度になった。退院させることはさほど難しいことではない。しかし、ずいぶん多くの方々が自らの命を絶った。そこで学んだことは、退院させるにしても、本人を強くして、地域に彼ら彼女らを支える体制を作っていかなければならないという前提である。すなわちわが国では、リハビリテーションと地域保健の活動が圧倒的に微力であった。その後、あつという間の何十年であるが、リハビリテーションと地域保健にずうっと携わることになってしまった。

リハビリテーションと地域保健の両者とも、医師以外のさまざまな専門職あるいは準専門職、さらには普通の人々の、知恵と力を借りることが要点となる。もちろん金や技術も必要だけど、結局は人材の質である、と気づいて教育に身を転じている。

障害をもったために合理的な配慮を必要とする人々の生活や人生を支援する営みは、当面この社会でマイノリティを形成している集団に対するクラスター・アドボカシーの営みであるとも表現できる。わが国が制定した「障害者自立支援法」とその実施体制は、われわれの社会におけるクラスター・アドボカシーの到達点でもあるが、まだまだおそろしく不十分である。

地域社会の不十分さを見定め、各領域の課題を設定する営みは、実際の具体的な事例の数々を検討する中から見えてくる。あらかじめの理論では測り知れない、専門家の予想などを容易にひっくり返す、多様な事例の数々は貴重である。その検討は一人ではできないものではない。社会の複数の専門職たちと、ときには当事者たちも交えて、見立てを徹底し、手立てを工夫する。この事例検討会では、複数の人々から情報が入力され、複数の人々が加工し、複数の人々に出力される。事例を通して地域社会が変わっていくし、同時に変えていく方向が見えてくる。

個々の事例を検討する営みと、地域社会を変革する営みとのあいだに、断絶があってはならない。これまでわが国の医療・保健・福祉の体制は断絶ばかりが存在して、まことに不合理な状態にあった。こうした中で、地域自立支援協議会は、個別事例の検討と地域社会作りが連動するために、実に有利な仕組みとなっている。もちろん、この仕組みをうまく使うか否かも、その地域社会を構成している人々の発想と工夫による。わが国の現在は、もちろん困難は大きいにせよ、こうした地域社会自身の工夫をすることが、以前よりもはるかに正当なものとして位置づけられている。

この場合の「アドバイザー」は、強いて表現すれば社会職員であろう。この言葉は、ソーシャルワーカーの中国語訳である。障害者あるいはわれわれ自身が生きやすい地域社会を作り上げるために、たった一人で工作地に乗る込むグリーンベレーのように、あの手この手を駆使しながら、目標をけっして諦めない活動を期待する。そして、そうした活動を正当な仕事として行えることは誠にうらやましくもある。

2009年3月

野中 猛（日本福祉大学教授：本事業委員）

アドバイザーへのメッセージ

異業種の関係機関が、相互に連携をとりながら、地域で障害のある方を支えていくシステムを構築していく。文字に落とせば、なるほど簡単そうだが、実は、なかなか厄介な営み。

福祉の分野は福祉の、医療の分野にも医療の、そして、行政には行政としての踏み越えることのできない枠組みがあって、それぞれに、氏素性も違うし、時には、利益相反になることもあるだろうし、共通言語もなかなか見つけにくい。

しかし、こうしたさまざまな関係機関のメンバーが、障害福祉に関わる地域の課題について、同じ目線で、同じテンションで、それぞれ、協働できていけたら、これは素敵だ。

「自立支援協議会」はその困難だけど、素敵なお取り組みを、とりあえず、それぞれの地域の器量をしっかりと見つめながら等身大で進めてみようという、壮大な試みだ。

まずは、相手の出方を伺いながら、共通点を探りあいながら、出会っていく。まるで、お見合いのように。

共通基盤や共通言語ができてきて、地域の課題に意気投合できるようになると、手弁当でも、場を共有して、その課題解決に向けて、会ってみたいと思う。それはあたかもデートのようだ。

しかし、いくら、同じ方向を志向して出会うカップルであっても、時に、つまらなくなったり、成果が実らなくて、倦怠期になったり、向かう方向がぼやけてしまったり、いつの間にか、出会う営みも億劫になってしまうことがあるだろう。

結婚にも仲人がいるように、地域のシステム作りにも、アドバイザーがいる。

アドバイザーとして、いろいろな地域に出向いていくときに、筆者の中のイメージとして、高校生頃の頃に見た、山田洋次監督の映画「同胞」（はらから）の倍賞千恵子が、よく、思い出された。

岩手の八幡平の小さな山村の青年団に、農村をモチーフにした芝居を主催してもらいたい。

劇団のオルグ活動を担う、倍賞千恵子が、単身で乗り込んでいく。

赤字が出たらどうする。体育館に1000人もの人を集められっこない。普段の仕事が犠牲になってしまう。

議論百出、そして、沈黙。

青年団長の寺尾聡の迷いや逃げたい気持ち。その風景の中で、苦楽を共にしながら、励ましたり、時に楽観的に方向を示したり、大丈夫と具体的な策を授けたり、その時の、倍賞千恵子の表情を思い出しつつ。

大成功の翌日には、みんなに惜しまれながら、次のオルグ地に向かって去っていく。

そんな仕事ができたら、なんと素敵なことだろうか。

地域をしっかりと診断しながら、地域の力量も見極めながら、その都度定点観測しながら、しかし、居座るのではなく、主体者が自立し、用を終えたら、「もういいですか、そうですか」「それでは」といって、去っていく。

アドバイザーもこんな仕事ができたら、どんなに、かっこいいだろうと思う。

アドバイザーは、「障害者自立支援法」下のあだ花なのか？

相談支援事業の本来業務の軒先をちょっと借りて、自立した動きが展開されるまでの、自転車の補助輪のようなものなのか？

或いは、ちょっと地域を元気にするための、一服の栄養ドリンクのようなものなのか。

それとも、ひょっとしたら、それ単独として、必要な、独占業務的な、システムコーディネーターのような仕事に転換していくものなのか。

業務としての科学性やアドバイザーとしての専門性も明示しつつ。

その見極めはまだ出来ていない。

しかし、全国に相談支援体制を構築し、どこの地域でも、日常的に「自立支援協議会」の目指す風景が展開されるまでは、あってほしい。

そのためにも、全国のアドバイザーは、今、相互にノウハウを交換し合い、情報を共有しあっていく必要がある。

福岡 寿（北信圏域障害者生活支援センター所長：本事業委員長）